

第十三回鎌倉樂しむ会

江戸歴史探索の資料

振袖火事（明暦三年）の時代背景

鎌倉樂しむ会
企画責任者 清藤 孝

振袖火事の時代背景

徳川家康公の時代

徳川家康公の入府は千五百九十年(天正十八年八月一日)ですが、この年の六月に小田原北条を滅ぼしたとはいえ、まだ、その残党が関八州には沢山いた。

さらに小田原北条と敵対していた房州里見氏なども未だ徳川家康公に臣従していなかったため、それらの討伐も緊急の課題であった。

このようなことから土塁の江戸城を修築する間もなく家臣団一万人の集住地を作ることが先決であった。

家康公は戦ではなく武田家が信長公に滅ばされてから、武田家の優秀な家臣団を臣従させるなどの経験から、小田原北条の残党も調伏し、家康公になびかせていった。また、一方において成り上がりの秀吉公が隙を見せれば、いつ戦いを挑んで来るかもしれない恐れも常にあったと思われる。

秀吉公はほぼ天下統一をなしたと思いき、家臣団への報奨に与える土地を求め、予てから大陸の明国の弱体化の情報を得ていたため、明国の皇帝を狙うという暴挙にでる。

歴史上に残る加藤清正公などが朝鮮国へ二度出兵し殺戮を繰り返したが、結果は朝鮮軍の食料輸送路のゲリラ活動により分断されるなどで敗北に近い形で、秀吉公の計画は頓挫した。その間愛妾の淀殿は幼帝秀頼を懐妊した。太閤秀吉公は誕生した幼帝秀頼を溺愛し豊臣政権の永続を願ったが、間もなく体調を崩し幕閣に政務を委ねることになる。

ここで、秀吉公は幕閣に五大老五奉行を作り、筆頭に前田利家を据え、徳川家康公を牽制した。

しかし、慶長三年(1598)九月秀吉公は、前田利家公、徳川家康公等五大老に「幼帝秀頼を頼む!」と言って、後顧の憂いを残しながらこの世を去っていった。後事を託された前田利家公も翌年の慶長四年(1599)四月に秀吉公を追うように亡くなる。

ここから徳川家康公の一人舞台の時代に入っていく。これに対抗したのが五奉行の筆頭石田三成で両者の確執は関ヶ原の戦場で決着(慶長五年—1600—9月)がつくことになる。

そして、石田三成を排斥した家康公は着々と豊臣家大阪城の包囲網を築いていく。

まず、家康公自ら先祖が源氏の血を引くものとして、慶長八年(1603)に征夷大将軍の官位を朝廷よりいただき、いよいよ江戸城の天下普請を始めていく。

家康公の素晴らしいと感ずるのは、過って敵対していた相手でも優秀な人材は臣従させ、その才能を活用する事であった。例えば武田の家臣であった大久保長安などがそうである。

また、日本で最初の武家政権を作り上げた源頼朝公の業績を研究したり、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」を勉強したことが伝えられ、武田信玄公の河川の管理術を学び、その専門家臣団を駆使し、着々と関八州二百四十万石をさらに整備していった。

徳川秀忠公の時代

一方、征夷大將軍を秀忠公に就任させ（慶長十年―1605）徳川家の盤石体制を築いていく。

この一件は大坂城の豊臣家を率いる淀殿の怒りを買ひ、幼帝秀頼の成長と相俟って大坂城冬の陣、夏の陣を経て、豊臣家は滅亡されてしまう。（慶長二十年―1615）

これで、家康公は生涯のスローガン「厭離穢土欣求浄土」を実現した安堵感からか死を迎えることになる（元和二年―1616）。

家康公の伝えられる遺言は「いまだ西国は豊臣恩顧の大名が多い、我を久能山に西を向け立ち姿で埋葬せよ。一年後には日光山に小さな祠を立て祀れ」というものだったという。

二代將軍秀忠公は内政、外交にも力を発揮し、江戸城と幕閣を強固なものとしていく。父・家康公の虎の威を借りる譜代大名本多正純の改易、豊臣恩顧の福島正則など

四十八家の改易を行った。

また、御三家の創設、鎖国の港を長崎、平戸に限定。娘・和子を後水尾天皇に入内させるなど数々の業績を残している。

元和三年（1617）には庄司甚右衛門に葺屋町（現在の人形町）吉原遊郭の営業を許可している。また、江戸市中の洪水を緩和するため、現在の水現道橋駅あたりから、神田山を開削し現在の浅草橋、柳橋を通し隅田川につなげている。



二代將軍秀忠公の
創建 二荒山神社

徳川家光公の時代

三代將軍家光公の時代に入り慶長十二年（1635）には全国の大名に参勤交代

の制度を定着させ益々江戸の城下町は発展していった。町並みの整備にかかる職人の流入、参勤交代の付き人などにより、人口は爆発的に増えていった。

家光公は「生まれながらにして將軍なり」と豪語するように祖父家康公を尊崇し政務を強力に進めていく。

老中制度も整備され政務は老中の合議制で運営され、將軍は決済するのみになっていく時代に入っていく。

大坂夏の陣以来平和な世の中が続き、鎖国とはいえ海外からの情報はオランダ風説書から得て幕府の運営に取り入れていた。しかし、寛永十四年（1637）に島原の乱が勃発し、幕府の威信にかけた苛烈なキリスト教徒の弾圧が始まった。鎮圧責任者には知恵伊豆ともいわれた松平信綱があたり鎮圧し、その後の江戸幕府には重きをなすようになった。

また、家光公の大きな遺産として日光東照宮の建設が上げられる。父の秀忠公の創建した東照社を正保二年（1645）朝廷より宣下され東照宮として豪華に再建し

た。
これが世界遺産として現代に受け継がれている。剛腕と言われた家光公も慶安四年（1651）に四十八才で亡くなってしまう。



徳川家綱公の時代

そのあとを継いだのが四代家綱公ですが、まだ十一才のことでした。家光公の没するのを予想したかのように由井正雪の事件が起き上がります。家光の弟・保科正之、大老の酒井忠勝、老中の松平信綱、阿部忠秋など優秀な家光軍団の幕閣が事前に鎮圧してしまう。

幕閣が優秀ですから、家綱公はゆつたり構え幕閣の決定事項は、ただ「そうせい」

ということとで「そうせい様」と呼ばれたといひます。

家光公の遺言は「東照大権現に死しても仕える」でした。家綱公はこの遺言を守り承応二年（1653）に家光公の「廟所・大猷院」を創建する。これは東照宮に並び称されるように世界遺産となっている。

また、鎌倉鶴岡八幡宮の「一ノ鳥居」も家綱公が寄進されている。

このように幕閣のしつかりとした徳川幕府とはなってきたが、人口増加に伴うインフラの整備も行っているが、災害（主に火事と隅田川の洪水被害）に強い都市造りも緊急の課題となっていた。

浅草待乳山聖天から三ノ輪浄閑寺に至る天下普請の日本堤により水害を防いでいたが、堤防の維持管理が問題であった。

そこで、幕府は日本堤の南側の田圃を二万坪に新吉原を造成し人形町から移転させ、吉原に通う人々に堤防の変化を見回させようと考えた。

丁度明暦三年一月十八日江戸本妙寺付近からの火事が発生し十九日には小石川

伝通院付近、その日の夕方には麹町から出火というように二日間にわたって江戸市中が燃え、江戸城天守閣まで焼け落ちてしまった。被災死亡者は十万人以上と史上空前の人災であった。

原因はあくまでも振袖火事という物語であるが、本妙寺の近くにある老中・阿部忠秋の屋敷からの出火を本妙寺が火元を引き受けたという説もある。

それは本妙寺が大火後に取り潰されなかったことと、元の場所に再建を許されて触頭（ふれがしら）にまでなったということである。

また、阿部家から関東大震災に至るまでの二百七十年間供養料が納められていたという。老中首座の松平信綱が中心となり指揮を執り江戸の街割りの大改造に利用したのではと考えられます。



以上

（文責 清藤孝）